原 著

チュプロフと“チュプロフ”学派
― 最近のロシアにおけるチュプロフ研究から ―

近　昭夫*

<要 旨>

旧ロシアの代表的な統計学者であったA. A. チュプロフについては、1917年の革命後に帰国しなかったこともありソ連時代には厳しく扱われてきたが、1950年半ばから彼を再評価する動きがみられていた。最近のロシアでは旧ロシアの復活が諸分野で顕著であるが、このような社会的風潮のなかでチュプロフの研究と社会的活動も改めて注目されている。昨年夏にロシアで収集した文献により、最近のロシアにおけるチュプロフにかんする研究の特徴を二つの点に整理してみた。ひとつは、チュプロフが1917年に出国してから1926年に死去するまでの海外での活動について、各地に分散している文献、資料を収集し、さらに個人宛の手紙等も調べて、詳細な事情が明らかにされてきていることである。他は、チュプロフがペテルブルグ工科大学在職中に多くの後進を育て、“チュプロフ学派”とよばれるほどのグループが形成されていたことが明らかにされ、彼らについても研究が進んでいることである。しかし、チュプロフの統計理論の基本的な部分についての本格的な議論は、まだ始まっていないように見受けられる。

キーワード　A・A・チュプロフ　チュプロフの統計理論　チュプロフ学派　チュプロフ研究の動向　チュプロフ理論の再評価

はじめに

旧ロシアの統計学者として著名なA. A. チュプロフの統計理論について、わたくしはしばらく前にいくつかの論稿を『チュプロフの統計理論』（産業統計研究社、1987年）という小冊子にまとめたことがある。その際、ベ・イ・カルペンコの論文[1)]（文末の引用文献リスト[1]）等により、1950年代半ば以降のソ連でチュプロフの研究が好意的に評価されはじめたことも見た。しかし、その後ソ連崩壊期をはさんで出版物数が減ったり、日本での入手が困難になったりしたこともあって、チュプロフをめぐる研究の動向は見定めがたくなっていた。

わたくしは2003年8月から9月にかけて、サンクト・ペテルブルグ経済財政大学に滞在し、イ・イ・イェリセーワ教授の協力も得て、チュプロフ研究にかんするいくつかの文献を入手することができた[2)]。これらの文献により、近年のロシアにおけるチュプロフをめぐる研究の動きをうかがうことができる。これらの文献を見ると、近年のロシアにおけるチュプロフ研究は大きく二つの点で特徴的であるように思われる。第一は、チュプロフの活動を全体的に捉えようとする動きであり、とくにこれまであまりよく知られていなかった1917年以降のチュプロフの国外での活動と生活について重心をおいた研究が進められている。チュプロフは1917年の夏休みにスェーデン等で過ごすために出国し、それ以降国外にとどまり1926年にジュネーブで客死した。その間の事情はこれまでの文献でもおおよそのことは述べられていたが、詳細については明らかにされていないままになっていた。第二は、チュプロフのロシアにおける影響にかんする研究である。チュプロフは当時国外でも著名であり、ロシア国内では傑出した立場にあって多くの研究者に影響を与えたことは上記のカルペンコの論文でも述べられていたが、「チュプロフ学派」と呼んでいいほどに大きな研究者のグループがあったことが明らかにされ、個々の研究者についても研究されている。

現在のロシアでは一般に旧ロシア時代への復古的傾

* 西南女学院大学人文学部　教授

向が顕著にみられるが、そのような動きの中で、ソ連に対抗した人々も含む諸々の事情で外国に移住あるいは亡命して国外で活躍したロシア人の活動や業績を、改めてロシア人の活動や文化の一部として評価しようとするナショナリステイックな志向が広く見られ、それと重なってソ連時代に正当に評価されてこなかった人々、迫害や抑圧の対象となり、不遇のうちに生涯を終えた人々を再評価し、これらの人々の功績を冷静に、客観的に評価し直そうとする動きがあることも、このような研究の動向と関連しているように思われる。

わたくしはイェリセーワ教授の紹介で、折からサンクト・ペテルブルグのプーシキン博物館で開かれていた「第4回国際科学コンファレンス　ロシア人国外生活者の文化　ペテルブルグ出身の亡命者—1917 年～1945 年—」[3] という研究集会の「経済思想と事業」のセクションに参加できた。このコンファレンスにはこの他にも「科学と教育」「社会と政治、宗教生活」「芸術」「文学」のセクションがあり、それぞれの分野と関連する多くの国外で活躍したロシア人の活動が取り上げられていた。ペテルブルグ出身者を中心に、史実を掘り起こし、再評価していこうということがこのコンファレンスの共通のテーマであるようであったが、このような研究集会に大勢の人が参加して熱心に討論している様子は、近年のロシアにおける社会的な動きと重ねてみて非常に興味深く、印象深いものがあった。チュプロフについての研究も、このような学問的雰囲気のなかで進められているものと推察される。

チュプロフは多くの外国のジャーナルに寄稿していたし、ドイツ、ノルウェイ、スェーデン、イギリス、イタリア、チェコスロバキア等の研究者とも交流していたので、彼の研究活動の跡はヨーロッパの各地に広がっており、彼に関連した文献・記録も各地に散在している。ロシア国内におけるチュプロフ関連文献収集の事情についても、イェリセーワは次のようにも書いている。「後になって、彼の未婚の妹マリア・アレクサンドロブナ・チュプロバは、おそらく、彼の文書の大半をレニングラードからモスクワのモスクワ国立大学に運び込んでいる。チュプロフの著作は、統計的方法にかんする限り初版が出版されたか、1960年にN. I. チェトヴェリコフとB. I. カルペンコの努力で再版され、わが国の読者にも知られているが、その他の著作はあまり知られていないままになっており、その多くは彼が寄稿していた新聞『ロシアの思想』（“Русская Мыслы”）、『ロシア通報』（“Русские Ведомости”や雑誌の紙面・誌上に分散している）（[3]p.16）。

近年の研究では、各地の図書館や資料室が所有しているチュプロフの手紙やノート、メモ、またこれまでは表に出ることがはばかられた個人宛の私信等も調査・発掘して、往時の事情の解明に役立てるというやり方がとられていることが特徴的である[4]。チュプロフがロシアおよび国外の新聞などに書いた記事も広範囲に調査・収集され、利用されている。

これらの研究により従来不明であったことや興味深い事実も明らかにされてきているので、小稿では近年のロシアにおけるチュプロフ研究により明らかにされたことを、上記の２点を中心に整理し紹介する。

アレクサンドル・アレクサンドロビッチ・チュプロフ（Aleksander Aleksandrovich Chuprov, Александр Александрович Чупров、1874－1926）は、有名な経済学者でモスクワ大学教授であったア・イ・チュプロフの子供として生まれ、モスクワ大学で数学を修め、その後ドイツのベルリン大学、シュトラスブルグ大学で国家学、統計学を学んだ。ロシアに帰国後、折から新設されたペテルブルグ工科大学（St. Petersburg Polytechnic Institute, Санкт-Петербургский политехнический инстут）経済学部で統計学を担当した。主著は『統計学要綱』（［２］，1909）であり、この本はⅠ.ノモグラフィア的（法則定立的）科学とイディオグラフィア的（個性記述的）科学、Ⅱ.カテゴリー的計算のノモグラフィア的機能、Ⅲ.数学的確率と統計的頻度（大数法則）、Ⅳ.統計的系列の安定性、の 4 章から構成されている。ドイツの統計学には、G. フォン・マイヤー、F. ジューチク等の社会統計学派の他にW. レキシス、L. ボルトキビッツ等の“大陸数理派”があった。イギリスで成立・発展した数理統計学は主として生物現象にかんする実験・観測データの処理法として発展してきたのにたいし、“大陸数理派”は社会現象にかんするデータの安定性の測定、その認識論的・論理的意味の解明を探究したことで特徴的であった。A. A. チュプロフの研究は、基本的にレキシス、ボルトキビッツに続く“大陸数理派”に位置づけられる。チュプロフの議論は、H. リッケルト、W. ウィンデルバンド等の新カント派の科学方法論、学問分類論を基礎にして数理統計学的方法の意義を論理的に明らかにしようとしたことに特徴がある。

1．チュプロフの活動について

1．ペテルブルグ時代

初めに、ペテルブルグ工科大学時代の研究について見ておこう。A.A.チュプロフは1901年の後期に、シュトラスブルグ大学で *Die Feldgemeinschaft*，*eine morphologische Untersuchung*（Strassburg, 1902. Hersg., G.F. Knapp.）により国家学博士の学位を授与されたが、その後帰国してモスクワ大学法学部で修士の試験を受けた。当時のロシアでは、この試験に合格することが大学、専門学校の教員になるための条件であったという。1902年にペテルブルグ工科大学経済学部に統計学の講師として招聘された。その際、父アー・イ・チュプロフと親交のあった経済学部長ポスニコフ（А.С.Посников）の尽力よるところが大きかった、とイェリセーワは書いている（［6］p.15）。

1909年に、チュプロフは主著である『統計学要綱』（［2］）を出版した。この論文は修士号（マギステル магистер）論文としてモスクワ大学に提出されたが、修士を超えて博士（ドクトル доктор）を授与されたという（［1］p.294）。1911年に、彼は国際統計協会（ISI: International Statistical Institute）の会員に選ばれた。

チュプロフは統計理論の基礎的な研究を進め、また新設されたばかりの統計学教室の図書を充実させる作業に積極的に取り組むことと並んで[5]、社会的問題にも大きな関心をよせていた。彼はポスニコフや父親の影響を受けて、早くからロシアの農業・農民問題に関心をもっていたが、1906年のストイルピン改革には、それは農村共同体を解体させ、農村を貧しいものと豊かなものに階層分離し、必然的に敵対的関係を導き、将来に非常に深刻な結果をもたらすことになるとして、小農民の生活を守るという観点から反対し多くの論文、論評を『ロシア通報』に寄せている。オルロフ（А.В.Орлов）によると、『ロシア通報』紙上のA.A. チュプロフの署名の論文・記事は40以上になるという[6]。

第1次世界大戦が始まると、チュプロフは戦争と関連する人口と人口統計の問題にとりくんだ。とくに、戦争が婚姻率、出生率、死亡率および出生比に与える影響について研究を始めていた。「ドイツにおける国民の食料」（1915）では戦争による食料不足と死亡率の上昇、「戦争と人口移動」（後にポスニコフの記念論文集（1916）に所収）では、ドイツ、フランス、ハンガリーの統計を用いて、戦争による出生比の安定性の破壊、婚姻率の減少、重婚の割合の増加、年が大きく離れた夫婦の割合の増加、等を指摘していた（参照：［6］p.19）[7]。

2．国外で留まった理由

1917年5月12日に、チュプロフは数ヶ月の予定で夏休みにスェーデン（ストックホルム）とノルウェイ（クリスティニア・現在のオスロ）で研究するために、ペトログラード市民局に外国行きのパスポートを申請した。ドイツの経済と人口の状態について研究できるのは、中立国であったスカンディナヴィア諸国だけであったからである（参照：［7］p.17）。彼は1917年6月に出国した。

チュプロフが帰国しなかった理由は、十分に明らかにされていない。彼の友人で手紙を交換していたデン（В.Э.Ден）によると、チュプロフは1917年9月に帰国しようとしたが、病気になり果たせなかった。そして、その後は金銭的に困難な状況となり、帰国を思いとどまったという（［6］p.20）。ドミトリイェフ（А.Л.Дмитриев）とセメノフ（А.А.Семенов）の論文「A. A. チュプロフの未公開のパンフレット」（［8］に所収）では、「A. A. チュプロフの勤務記録」のなかの匿名のメモにも同様のことが書かれているという。しかし、ロシアの外交官でチュプロフとストックホルムにいたグリケビッチ（В.В.Гулькевич）はチュプロフを追悼した文で、チュプロフは1917年の秋にロシアに帰ることを考えていたが「当時、事態はますます不安な陰影を濃くしていたので、私は彼に帰国を急がないで、状況がはっきりするまで待った方がいいと説得した。」と書いているという。また、『ロシア通報』の編集にチュプロフと共に関わったローゼンベルグ（В.А.Розенберг）は1926年のプラハでの追悼集会で、死ぬ少し前の彼との率直な話で、「彼の市民的世界観、彼の政治的見解は、偶然の、どんな厳しい状況のもとでも、大きく揺れることはなかった」と述べたという。また別の友人への手紙にも、帰国に気のりがしないと書いているという。チェトヴェリコフ（Н.С.Четвериков）はチュプロフが帰国しなかった理由は、彼がロシアから時間遅れで届く新聞や雑誌をよくみていて、ロシアでの教育と研究の条件が「非常に悪い」ことを知っていたからであるとしている、という[8]（［7］p.26, ［6］pp.217−128）これらのことから、チュプロフは単に金銭的な理由だけで、帰国を見合わせたのではなかったことが推察される。

シェーニンはパリの国立図書館で、チュプロフの「ボリシェヴィズムの崩壊」（A Tchouprov (Professeur d'Economie politique à l'université de Moscou), "*La décomposition du bolshevisme*". Stockholm, Février 1919.）と題する未公開の資料を見つけ出し、それを基にもともとカデット（立憲民主党）派であったチュプロフはソヴェト体制に非常に批判的であったが、最終的には民主主義とはなんの関係もない独裁体制を確立したとして「レーニンを非難し、ボリシェヴィズムの政治的アイデアは死んだと書いている」、と述べている（［7］p.23）。この資料のコピーがシェーニンからドミトリイェフとセメノフに送られ、彼らも上記の論文でこの資料を紹介・引用して、以前から農業問題に強い関心をもっていたチュプロフはソヴェトの農業政策を強く非難していたと書いている（［8］pp.3－5）。ただし、ドミトリイェフ・セメノフも指摘しているように、この未公開パンフレットの筆者が“モスクワ大学政治経済学教授　A．チュプロフ”となっているのは誤りである。モスクワ大学教授であったのは父親のア・イ・チュプロフであり、彼はすでに1908年に死去している。また、彼の名前のドイツ語的表記も通常のもの（Tchuprow）ではない。ハイデ・セナートはこれらの点に注意して、この文書はチュプロフが書いたものではなくニセものであり、なにものかの挑発（provocation）によるものだと指摘している（［9］p.305）。シェーニン等の指摘が事実かどうかは定かでない。

この間、チュプロフは1917年12月には、ストゥルーベ（П.Б.Струве）の推薦によりロシア科学アカデミー通信会員に選ばれている。

デンは、チュプロフがソ連政府から帰国するように要請されたことがあることを示唆して、次のように書いているという。「1918年中、ソ連政府はなんどかモスクワに来て、中央統計局の組織にかんする会議に参加するように求めた。残念ながら、この申し出が彼に届いたかどうか、また彼がそれにどう答えたかは、私は知らない。」（［8］p.217）

3．国外での活動

ストックホルム時代　チュプロフは1918年にストックホルムで[ロシア人亡命者の]消費組合中央会（Центросоюз）統計部門のチーフに就くことを依頼され、受け入れた（［6］p.217）。仕事のかたわら、チュプロフは『世界経済ニュース』（*Бюллетень мирового хозяйства*）の編集に当たることになった。1919年1月から1920年6月まで、チュプロフはタイプ用紙で70ページ以上の原稿の雑誌を毎月2号発行した（［7］p.27）。チュプロフはこの雑誌の編集に勢力を注いだが、評判はあまりよくないとチェトヴェリコフ宛の手紙に書いている。しかし、残念ながら、この雑誌はいまだにどの図書館でも所在を確認できていないという（［6］217ページ）。

ドレスデン・プラハ時代　1920年にチュプロフはドレスデンの近郊に移り住み、ここで数年を過ごした。安定した収入はなかったが、ほとんど孤独のうちに過ごし、研究に専念した。この間、彼は1922年にライプツィッヒの保険協会で、1924年にはコペンハーゲンとオスロとの保険協会で教授、統計家、保険数学者、保険数学専攻の学生等の少人数の聴衆に、相関理論について講義した。相関理論についてチュプロフは、1912年にスルツキーから彼の著書『相関理論と曲線分布理論の基礎』（Е.Е.Слуцкий. *Теория корреляции и элементы учения о кривых распределения.* Киев 1912）を寄贈されて以来関心をもち、当時すでにロシアでも知られていたG.U.ユールの『統計学入門』（G.U.Yule, *An Introduction to the Theory of Statistics*, 1911）をスルツキー、チェトヴェリコフ等と共にロシア語に翻訳することも考えたこともあった（［6］p.19）。

1923年には、ロンドン王立統計協会の名誉会員に選ばれた。1925年にはオスロとコペンハーゲンでの講義を基にして、彼のもう一つの主著であり、世界的にも著名となる『相関理論の基本概念と基本問題』（*Grunbegriffe und Grundprobleme der Korrelationstheorie*）を出版した。この本は翌1926年にはチェトヴェリコフによるロシア語版が、1939年にはロシア出身でイギリスに在住していたイサーリス（L.Isserlis）による英語版が出版されている。

チュプロフは1925年の春と夏を、プラハのロシア法科大学（Russian Juridical Faculty）の教授として過ごした。しかし、ここの官僚主義的雰囲気は彼の気に入らず、そのうえ健康も害することになった（［7］p.27）。1925年9月にチュプロフは、北イタリアで休息をとった後、国際統計協会（ＩＳＩ）の大会で抽出法について報告するためにローマにでかけた。しかし、ローマで発病し、気管支炎とマラリア状の疾患で3ヶ月間、危険ではないが重症な状態が続いた。その後友人のグルケヴィッチがいるジュネーブに移ったが、2月後の1926年4月19日に52歳で死去した（［1］

p.310、［7］p.28）。

国外生活の時期はチュプロフにとって「非常に生産的な」時期であった、とハイデ・セナートは書いている（[9]p.305）。この時期にチュプロフは、当時議論されていた数理統計学の多くの問題について *Skandinavisk Akutuarietidskrift, Nordisk Statistik Tidskrift, Biometrika, Metron* 等の外国のジャーナルに多くの論文を発表している。シェーニンは[7]の巻末のチュプロフの著作目録に1918年以降に書かれた、統計系列の安定性、度数分布のモーメントの数学的期待値、相関理論、ビジネス統計、景気予測等にかんする33の論文をリスト・アップしている（[7]p.128）。

追悼行事　チュプロフが死去したことは、レニングラードの新聞（“*Красная газета*”）の1926年4月23日の夕刊で報ぜられた。その後、いくつかの場所で追悼の集会が開かれた。

1926年5月30日に、統計学会の実行委員会が追悼集会を開いた。この会では、チュプロフの活動についてチェトヴェリコフが、チュプロフの学問的意義についてスルッツキーが、教師としてのチュプロフについてヴィノグラードバが報告した。実行委員会は故人の学問的著作の出版を提案し、ソ連中央統計局にチュプロフの記念論文集を出版することを提案した。

1926年5月30日に、エム・イ・カリーニン名称レニングラード工科大学経済学部ソヴェトが追悼集会を開いた。この集会の資料は、『レニングラード工科大学経済学部紀要』1928年25巻1号に公表された[10]。

これより早く1926年4月27日に、プラハのロシア法科大学エス・エヌ・プロコビッチ教授の経済学研究室でチュプロフの追悼集会が開かれた（この集会の資料は、同研究室の『ロシア経済学論集』1926年第6号に収められているという）（［6］p.25）。

2．“チュプロフ学派”の人々

チュプロフの門下からは、ロシアの統計学の発展に寄与した多くの研究者が輩出した。イェリセーワは「誇りをもってチュプロフ学派」を自称している人々として次の名前をあげている（［3］p.17）。チェトヴェリコフ（1885－1973）、ポリャーク（Г.С.Поряк 1888－1954）、アンダーソン（О.Н.Андерсон 1887－1960）、ヴィノグラードバ（М.М.Виноградова ？－1919）、ヴィノグラードバ（Б.И.Виноградова 1889－1975）、カルペンコ（Б.И.Карпенко 1892－1976）、コーン（С.С.Кон 1888－1933）。この他に、チュプロフの講義を聴いた人として、ホティムスキー（В.И.Хотимский 1892－1933）、ストルミリン（С.Г.Струмилин 1877－1974）、ネクラシ（Л.В.Некраш 18 86－1949）がいたという。チェトヴェリコフ、カルペンコ、アンダーソン、ストルミリン、等は日本でもよく知られている。このうち波乱に充ちた生涯を送った人々を、イェリセーワの紹介を中心に見ていくことにしよう。

チェトヴェリコフ　われわれは彼の名を『統計学紀要』第Ⅲ巻、1957年に、第Ⅲ部　特集「A．A．チュプロフ没後30年によせて」に論文「ベクトル的投影で叙述された相関理論の方法と指標の論理的構造」を寄せた人として知っている。彼は指数論を専門に研究したが、数理統計学の理論的問題、大量現象の分布法則の研究、抽出法も研究した。ソ連時代になってモスクワに移り、中央統計局の方法論部門のチーフ、景気研究所のチーフも勤めた。実践的な研究も要求されて、収穫統計資料の研究をし、パン価格と収穫との関係を研究したこともある。

彼の兄は有名な遺伝学者であったが、1948年に多くの遺伝学者が弾圧された折にゴリキー市に追放された。チェトヴェリコフはこの時、兄と共にゴリキーに移り、兄が死去するまでそこに留まった。フルシチョフの“雪解け”期にモスクワに帰り、鉄のカーテンが引かれていた時代に不足していた知識を補足する教育にあたった。

シェーニンによると、チュプロフは国外に出てからもチェトヴェリコフと連絡をとり続けた。遺されたチュプロフの手紙を見ると、彼はチェトヴェリコフに大きな信頼を寄せていた。相関理論の著書をロシア語訳したのもチェトヴェリコフであった（［7］p.56-58）。彼は、50年代末にカルペンコと共に、チュプロフの3冊の主要著作（『統計学要綱』[2],M.（モスクワ）1959、『相関理論の基本的諸問題』M.1960、『統計学の諸問題　論文集』M.1960）を復刻している。

カルペンコ　カルペンコは、上記の『統計学紀要』第Ⅲ巻に「A．A．チュプロフの生涯と活動」を書いている。この論文はA4版34ページの長い論文であり、チュプロフの生涯を、1．こども時代と学習の日々（1874－1901年）、2．ペテルブルグ時代（1902－1916年）、3．外国生活時代（1917－1926）に分けて、チュプロフの各時期の生活、研究と社会的活動に

ついて詳細に書いている。

カルペンコは、長い間、財政統計関係の仕事に従事した。彼には、『財政統計　税と予算の統計』（1928年）、『指数分析の方法』（1959年）、『数理統計学のカテゴリーと概念の発展』（1978年）等の著作があるという。彼は「闘士的性格」のため、3度ラーゲリ送りになったことがあるという（娘の「思い出」では2度と書かれている）。[11)]

アンダーソン　アンダーソンの名前は、日本でもブルガリアのヴァルナの大学にいる研究者として、戦前から知られていた。1960年に彼が死去してから間もなく2巻の選集(Oskar Anderson, *Ausgewählte Schriften*, Band 1,2, J.C.B. Mohr (Paul Siebeck) Tübingen, 1963) が出版され、その巻頭の解説(“Oskar Anderson 1887-1960”）で彼の履歴の詳細が知られるようになった。その後も、アンダーソンはブルガリア、西ドイツで活躍したという印象が強く、チュプロフとの関係についてはあまり注目されたことはなかった。チュプロフとの関連で日本では、戦前からむしろSt. ペテルブルグ大学講師であったカウフマン（Al. Kaufmann, *Theorie und Methoden der Statisitik*, J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen 1913：ロシア語のテキストからの独訳）の方がよく知られていた。しかし、イェリセーワはアンダーソンを、チュプロフ門下で国際的に最も著名になった研究者としてとりあげている。

アンダーソンはチュプロフの助手、ペテルブルグ工科大学経済学部の統計学・地理学教室の図書館の主任を勤めた。チュプロフのゼミナールに参加し、時系列相関の研究に取り組んだ。若い時期には左翼であったが1920年、彼はセバストポリから出国し、コンスタンチノポリスを経てブタペストに短期間滞在した。やがてブルガリアに移り、ヴァルナ商科大学で教授となった（1924年—1933年）。この間の貧窮期の就職活動では、チュプロフが手助けをしたという。ヴァルナ時代に書かれた“ハーヴァード式景気予測法”の批判や時系列相関に関する論文は、戦前の日本でも知られていた。

1930年にアメリカのコーネル大学で開かれた農業にかんする国際会議に出席し、「確率と経済研究」について報告した。また、彼の著作『ブルガリア農業の社会経済構造』(ベルリン、1930年)は有名になった。1933年にロックフェラー給費者としてイギリスとドイツを訪ねた。彼は1930年に創設された国際計量経済学会の発起人の一人でもあった。1940年にブルガリア政府は食料配給構想について研究するために、アンダーソンをドイツに派遣した。1942年に、彼はキール大学に招かれた。戦後、1947年にミュンヘン大学に招かれ、統計学講座を担当した。彼はウィーン大学とマンハイム大学から名誉学位を授与され、イギリスの王立統計協会の名誉会員に選ばれた。

アンダーソンの2冊の著書（*Einführung in die mathematischen Statistik*、Wien 1935、*Probleme der statistischen Methodenlehre in der Sozialwissenschaften*, eds., 1956, 1957, 1962）の著者としても知られている。アンダーソンは彼の考えがチュプロフとの交流から生まれたと明示的には述べていないが、動態系列間の相互関係の測定というアンダーソンの考えは基本的にはチュプロフの原因と結果の複数性という考えを敷衍したものである、とイェリセーワは書いている（［6］p.33）。彼は、1960年にミュンヘンで死去した。

N.M ヴィノグラードバ　ヴィノグラードバは上記の『統計学紀要』第Ⅲ巻に、「A. A. チュプロフの統計学教育の方法」を書き、チュプロフは「若い研究者たちに教えることを彼自身の学問研究と同じ価値をもつ仕事である」と考えていたと述べていた。彼女は、1924—35年にレニングラード国立大学、技術・経済・計画大学で、1936年からはモスクワ技術・経済大学で教えていた。彼女が編集した『統計学一般理論』（1963年）には、チュプロフの影響が見られる：この本は、“雪解け”の時期にあってスチューデント t 検定やフィッシャーF検定を自由にとりあげていたことが特徴的であった、とイェリセーワは述べている。

コーン　コーンは1911年にペテルブルグ工科大学を卒業し、食料にかんする特別会議の事務局の仕事をした。その後ティフリス大学で講義をし、『統計学講義』を書いた。この本はチュプロフから高く評価されたという。1921年1月にパリに移り、その後1922—23年にプラハ・ロシア法科大学の私講師になった。彼は生涯を外国で終えた。

ホティムスキー　ホティムスキーは、チュプロフ学派との関わりは多くはなかったが、イェリセーエワによると「有能なオルガナイザー」であった。1938年に逮捕され、銃殺された（［6］p.35）。

おわりに

チュプロフおよび“チュプロフ学派”の人々について、最近のロシアでのチュプロフ研究で特徴的な点を見てきた。なによりも印象的なのは、研究の環境が大きくかわり、論者達が自由に研究し、議論していることが感じられることである。上で示した1957年の『統計学紀要』第Ⅲ巻では、それまで公に議論することがはばかられてきたチュプロフをとりあげ「チュプロフ没後30年」の特集を編むに際して、編集者はまずもって「チュプロフは全生涯を通じて唯物論者であり、揺るぎのない、因果性の上にしっかり立っていた。1902年～1907年には、彼は経済学的および社会学的諸問題を研究し、K. マルクスの著作の強い影響を受けたが、しかし間もなくベルンシュタイン主義者の思想的影響を受けるにいたった。」とか、チュプロフの「有名な原因と結果の多数性の解釈において、唯物弁証法にぴったり接近しなければならなかった」とか、断らなければならなかった（傍点は引用者）。

カルペンコの1957年の論文[1]も、そのような“まえおき”があって、はじめて掲載ができたのであろう。カルペンコ自身も、チュプロフの「イデオロギー性」は1890年代に形成されたので、「マルクス主義的な徹底した学説よりも、マルクス主義の日和見主義的な学派により親近感を感じた」として、チュプロフの限界を指摘している。しかし、その一方で「哲学の諸問題では唯物論者であったので、A. A. チュプロフは社会主義の考えに接近し、そして社会主義運動に同感した。彼は権力の新しい階級への、すなわちプロレタリアートへの移行を合法則的なものとみなした。彼の亡命者達にたいする消極的な態度、反ソヴェト的陰謀への嫌悪はここに由来する。」（[1]p.311）と書いていた。

この点では近年の研究は、まったく気兼ねなしに自由に進められているようである。社会的運動や政治的立場も含めてチュプロフを全体的に評価しようとしていることは、歓迎すべきことである。ただし、議論の展開に“ロシア主義的”傾向や、ソヴェト体制に対抗したこと、あるいは体制公認の学問に同調しなかったこと自体を学問的評価と結び付ける傾向があるようにも思われるので、この点では注意する必要があるように思う。

チュプロフの研究については、総じて、研究内容や理論の検討よりも、研究活動をめぐる周辺の事情に関心が集まっているように思われる。多くの新しい資料を発掘・利用することによって今までよく分からなかったこと、不明であったこと等について教えられることが多々あるということでは、興味深いものがある。新資料発見のための努力は評価しなければならないであろう。しかし、チュプロフの研究や理論について、現在の観点からみた検討が十分に行われているとはいえない。今後この点についてより本格的な検討が進められ、研究が深まっていくことを期待したい。今後の研究動向を見守りたい。

引用文献

1）ベ・イ・カルペンコ、「A. A. チュプロフの生涯と活動」ソ連科学アカデミー『統計学紀要』，第Ⅲ巻、1957年. 引用文献［1］(以下、同様)。この論文の要点は、上記の［近1987］で紹介した。この第Ⅲ巻には、2節でみるチェトヴェリコフ、ヴィノグラードバの論文も収められている。

2）入手した主な文献は次のとおりである。

①『アレクサンドル・アレクサンドロビッチ・チュプロフ』（没後70年記念コンファレンス資料　1996年11月27－28日），サンクト・ペテルブルグ経済財政大学、1996年.［3］—これはチュプロフ没後70周年を記念して開かれた、サンクト・ペテルブルグ学者の家の社会経済の諸問題と統計学部会のコンファレンスの報告集であり、A.I.ムラヴィエフ「論理学と科学方法論」、M.M.ユズバシェフ「A.A.チュプロフによる統計学の論理・哲学的基礎づけ」、I.I.イェリセーワ「A.A.チュプロフの貢献」、V.I.アファナシェフ「A.A.チュプロフの考えと統計学発展の諸問題」、E.S.シュマリヒナ「抽出法にかんするA.A.チュプロフ」、J.V.ソコロフ「A.A.チュプロフとビジネス統計」等、11の論文が収録されている。この論文集の巻末には、未公開のチュプロフの論文「統計物理学の観点からみた非決定論の問題」が収録されている。

なお、1990年代になってロシアでは、数学者コバレフスキー(Владимир Иванович Ковалевский　1848-1934 гг.)、経済学者ツガン・バラノフスキー(Михаил Иванович Туган-Барановский　1865-1919 гг.）等、世界的にも著名な研究者についての学術コンファレンも開かれている。

②イ・イ・イェリセーワ「ロシア人国外滞在者の統計学：ア・ア・チュプロフとオ・エヌ・アンダーソン」，『ロシア人国外滞在者　1917－1939年』、2000年，［4］。

③『ロシア人国外滞在者　1917－1939年』、第2巻、2003年，［5］。この論文集には、コンファレンスを主催・共催、支援したロシア科学アカデミー、サンクト・ペテルブルグ

歴史博物館、ロシア文学研究所（プーシキンの家）、国立エルミタージュ博物館等 13 の組織、団体が連記されている。

④ロシア科学アカデミーサンクト・ペテルブルグ・センター『経済学の発展におけるレニングラード・ペテルブルグ出身研究者の貢献』、2003 年，［6］－これはサンクト・ペテルブルグ 300 年を記念して編集された論文集であり、チュプロフの他に L.V.カントロヴィッチ、V.V.ノボジーロフ、等が取り上げられている。

⑤ Oscar Sheynin, *A.A. Chupurov : Life, work, correspondence. The making of mathematical statistics*, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, 1996 (Transl. from Russ. [1990] by the author), ［7］.この本は 1990 年にソ連国家統計委員会により出版されたが、発行部数は 220 部だけであった。

3）『第Ⅳ回　国際科学コンファレンス　2004 年』のプログラム（文献［8］）を参照。

4）このような研究の仕方は、チュプロフとマルコフとの確率論の問題をめぐる往復書簡を詳細に研究したシェーニンの影響によるところが大きいようである。（O.Sheynin［7］を参照。）シェーニンは科学論、確率論史にかんする多数の論文を発表し、ソ連における科学史の研究者として注目されていた。プレハーノフ経済大学等モスクワのいくつかの大学で教壇に立っていたが、1991 年以来ドイツに在住している（［7］編集者のはしがき）。

5）チェパルーヒン（В.В. Чепарухтнт）「サンクト・ペテルブルグ工科大学におけるＡ．Ａ．チュプロフの統計学講座の文庫」（［3］に所収）を参照。ここでは、蔵書が１．数学文献、２．統計的計算の組織、方法および技術、３．統計学に関する文献索引、４．諸分野における応用統計学（研究結果と方法論）、６．ロシアのゼムストボ統計、７．初期（1920 年代―30 年代初め）のソヴェト統計、８．ロシアおよび外国の定期刊行物、９．16－18 世紀の一般文化的に価値 のある文献、に分けて、それぞれの特徴が述べられている。

6）オルロフはそれらの一部のリストを、論文「1906－1910 年に小農民を擁護したＡ．Ａ．チュプロフの社会活動」（［3］に所収）で、不完全であると断りながら次のようなリストを示している。

「農業問題においてわが国の大臣はいかにして破滅したか」（1906 年９月８、10、13、14 日）

「農民銀行は誰に役立つか」（1906 年９月 28 日）

「耕地整理技師委員会による命令」（1906 年 10 月 5、6 日）

「再び耕地整理技師委員会の命令」（1909 年 10 月 15 日）

「共同体からの独立に関する知事の回状」（1907 年１月４日）

「他人の権利を犯さずに」（1907 年１月 24 日）

「追加的な分与地の配分方法について」（1907 年４月 19 日）

「追加的な分与地を配分する際の契約公正証書はいかにあるべきか」（1907 年４月 21 日）

「地主的社会主義」（1907 年５月 20 日）

「幻想と現実のフートル経営」（1907 年８月 14、17 日）

「北ドイツの個人所有経営における労働問題」（1907 年９月 16、18 日）

「人口に関する学説における新たな問題」（1907 年 10 月 19 日）

「農民のための歴史的調査資料」（1907 年 11 月 28 日）

「農業問題における上からの改革と下からの運動」（1908 年１月１日）

「1906 年 11 月９日の命令と第３回議会における野党の戦略」（1908 年７日）

「わが国の大土地所有者のポートレイト」（1908 年３月 28 日）

「経済的自由主義の旗の下に」（1908 年８月６日）

「シドロフスキーの講演について」（1908 年 10 月 30 日）

「統計の擁護のために」（1908 年 10 月６日）

「意思の強いひとへの期待」（１909 年１月１日）

「国会への１月９日の命令」（1909 年２月 19 日）

「地主貴族に役立つ農民銀行」（1910 年 12 月１日）

「農民銀行と意志強固なひとへの期待」（1910 年 12 月９日）

これらの一連の論文についてオルロフは、統計的分析法がうまく使われ「経済分析の統計的例として利用できる」と書いている。なお、ストイルピン改革については、田中陽児・倉持俊一・和田春樹『ロシア史２』山川出版、1994 年を参照。

7）この論文（Война и движение население）は[6]に付録として収められている。

8）シェーニンは、チュプロフが亡くなった 1926 年初めの日付のある、チェトヴェリコフのチュプロフ宛の手紙を［7］（p.29）で翻訳、紹介している。この手紙でチェトヴェリコフはチュプロフに次のように伝えている。スルツキー（E.Slutzky）と手紙を交わして相談したが、長い間敢えて手紙を書くことができなかった。コンドラチェフ（Nikolai Dmitreivichi Kondratiev）にチュプロフの帰国が可能かどうか尋ねられた。コンドラチエェフの主宰する景気研究所が立ちあがって『景気予測の諸問題』（*Voprosy Konjunktury*）出版する運びになったので、チ

ュプロフを受け入れることが可能になった。研究条件もそう悪くはなく、外国への旅行もできる。ただ、さまざまな会議・委員会の仕事をしなければならないかもしれない。問題は、現在は状況が絶えず変化し、すべてが変化し危険になる可能性がある。正直にいって、「非常に経験のある」ひとの意見を聴いたところ、「できれば、あと1年は待った方がいい」とのことであった。……

周知のように、「非常に経験のあるひと」が危惧したとおり、コンドラチェフは1927年に逮捕され、1938年には処刑されることになる。

9）ハイデ・セナートは、この仕事はチュプロフがペテルブルグでローゼンベルグと共に農業改革と人口問題をとりあげるために『ロシア通報』を編集していたことの延長上の仕事であった、と述べている（［9］p.304）。しかし、この消費組合がどんな組織であったかは不明である。シェーニンはチュプロフが the chief of the prerevolutionary Tsentrosoyuz [All-Russian (?) Cooperative Society]を引き受けた書き、組織がロシア人だけによるものであったかどうかも不明であることを示唆している（［7］p.26）。ハイデ・セナートはそれに Russian émigré cooperative centres という訳語を当てている。［9］p.304）

10）この号には、次の8人の話の要旨メモが採録されている（Торжественное заседание Совета Экономического Факультета Ленинградского Польтехнического Института имени М.И. Калинина , 30 мая 1926 года, Посвященное памяти профессора Александора Александровича Чупрова. Ленинградский Политехнический Институт, *Известия экономического факультета*, Выпуск I (XXV) ,1928.)。

V.E.デンの話「チュプロフの略歴と個人的特性」

A.F.イヨッフェの話「A. A. チュプロフ」

N.S.チェトヴェリコフの話「A. A. チュプロフの統計学のアイデア」

L.N.マレッスの話「ロシアの統計学にたいするA. A. チュプロフの意義」

V.V.ニコリスキーの話「統計学者・イデオローグとしてのA. A. チュプロフ」

S.A.ノボセリスキーの話「人口論研究者としてのA. A. チュプロフ」

N.M.ヴィノグラードバの話「A. A. チュプロフの統計学ゼミナールについて」

B.I.カルペンコの話「A. A. チュプロフの統計学教育のやり方」

11）［6］の巻末の付録の一つに、カルペンコの娘ガリーナ・ボリソブナ・カルペンコが書いた「想い出から——」（Из воспоминаний—）というエッセイが収められている。そこにカルペンコが、理由は示されていないが 1938 年と 1949 年に逮捕され、それぞれ 5 年と 6 年流刑されたことが述べられている（[6] pp.227,228.）。

引用文献

[1] Карпенко Б.И. : *Жизнь и деятельность А. А. Чупрова.*, АН СССР, *Ученые записки по статистики*, Том.Ⅲ, 1957.

[2] Чупров А. А. : *Очерки по теории статистики*, СПБ., 1909 2-е изд. пересм. и доп. СПБ., 1910 (репртнт Москва 1959).

[3] *Александр Александрович Чупров 1874-1926. Материалы конференции к 70-летию со дня кончины. 27-28, Ноября 1996г.* Издательство Санкт-Петербугского университета экономикн и финансов、1996.

[4] Елисева И. И. : Статистика, А. А. Чупров и О.Н. Андасон. *Зарубежная Россия 1917-1939 гг.*, Санкт-Петербург, 2000.

[5] *Зарубежная Россия 1917-1939 Санкт-Петербург*, Книга 2, ≪ Лики России ≫ ,Санкт Петербург 2003.

[6] Российская академия наук,Санкт-Ретербургский научныи центр, *Вклад ленинградсих-петерюугских ученых в развитие экономической науки. К 300-летию Петербурга,* Санкт-Петербург, 2003.

[7] Sheynin Oscar : *A. A. Chuprov : Life, work, correspondence.* The making of mathematical statistics, Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen, 1996 (Transl. from Russ. by the author).

[8] *Ⅳ международная научная конференция. Культула российкого зарубежья петербуржцы-эмигранты 1917-1945гг.* Програма и приглашение, Санкт-Петербург, 3-5 Сентября 2003.

[9] Heyde C.C., Senata E. : *Statistics of the Centuries*, Springer, Canberra・New York・Sydney, 2001.

A Study of the Development of Recent Russian Research on A. A. Chuprov and the "Chuprov School"

Akio Kon

<Abstract>

A.A. Chuprov was a Professor of St. Petersburg Polytechnic Institute and one of the most famous statisticians in Russia before the October Revolution. He left Russia in the summer 1917 before the Revolution in order to research the influence of war on fertility and mortality at Scandinavian countries that kept neutral during World War I. After the Revolution he continued to stay at Stockholm, then moved to Dresden, and did not return to Russia until his death in 1926 at Geneva. He contributed many papers to the major European statistical journals in 1920's, and he was elected an Honorary Fellow of the Royal Statistical Society in 1923. Mostly due to not returning to Russia even after World War I, however, his works were negatively evaluated throughout the Soviet Union era After Khrushchev era, from the objective point of view the study to reevaluate and appreciate his works began. Since then, many papers on Chuprov have been published and the significance of his research also recognized among Russian statisticians.

Now it seems that since 1990, on the social trend to reevaluate the Russian Empire time and the Russian tradition, Russian statisticians have been interested in Chuprov and reviewing his works from some nationalistic viewpoint. They are researching and discussing Chuprov's works more freely in comparison with the 1950's social situation, collecting papers, articles of many journals and newspapers, even private letters scattered in Russia and foreign countries. They found many new interesting, important facts, especially concerning Chpurov himself and the academic group of his former students. However, it seems necessary to have a little more time for Russian statisticians to research and examine the essential aspects of the statistical works and theory of Chuprov.

keywords ; A.A. Chuprov ; Statisitical theory of Chuprov Chupov School ;
trend of research concerning Chuprov ; revaluation of statisitical theory of Chuprov

Professor, Faculty of Humanities